「滑稽って」

藤森荘吉

エイプリルフール（万愚節）に人を笑わせるような、「微苦笑」を誘うような、「滑稽俳句」を作ってきた。広辞苑の「俳句」の項をひくと、その第一義に、「俳諧（はいかい）の句。こっけいな句」と記されている。その次の意味に、「五・七・五、季題、切れ字などを含む」との解説文がある。

では、その「滑稽（こっけい）」って何なの。ここでまた広辞苑を引用しよう。『滑稽』―（「滑」は乱、「稽」は同の意。知力にとみ、弁舌さわやかな人が、巧みに是非を混同して説くこと。また、「稽」は酒の器の名。酒が器から流れ出るように弁舌のとどこおりないこととも いう）

①おもしろおかしく、巧みに言いなすこと。転じて、おどけ。道化（どうけ）。諧謔（かいぎゃく）。懐風藻「弁正法師…性―、談論に善し」。「「―な話」

②いかにもばかばかしく、おかしいこと。「本人は大真面目だが、はたから見れば―だ」

明鏡国語辞典も見てみよう。『滑稽』―おかしかったりばかばかしかったりして、笑いの対象になること。「―なしぐさ」

なるほど、初めて触れる字義もある。やはり何事も原点を辿っておく価値はあるものだ。では、「諧謔」はどうだろう。

『諧謔』―（「諧」も「謔」もたわむれの意）おもしろい気のきいた言葉。おどけ。しゃれ。滑稽。ユーモア。「―を弄する」（広辞苑）

おや、また「滑稽」に戻ってしまった。が、まっ、よく分からなくなったけれども分かった、ような気がする。

ユーモア、洒落といえば、「落語」？　共通点はありそうだ。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

熊五郎「このごろ、や・かな、とかいうの始めましてね」

ご隠居「おう、熊さん、なんだい、その、や・かなってのは」

熊五郎「ご隠居ならご存じでしょう」

ご隠居「まあな、そりゃ、俳諧だな、お前さんも発句を捻るかい」

熊五郎「へーさすがですね、ご隠居、こいつに四季の詞を入れるん」

ご隠居「ああ、歳時記栞草なんてのがあってな」

熊五郎「で、ひとつ伺いますてぇとね」

ご隠居「なんだい」

熊五郎「あのぉ、唐辛子てぇのね、ありゃ春だってね」

ご隠居「そりゃ違うだろ、ありゃ秋だな、えっ」

熊五郎「いやいや、冬来たりなば春唐辛子なんでぇ」

―んん、ってかぁ。

「この先を考へてゐる豆のつる（吉川英治）」

～お次へと繋ぎます。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。